

詳報 第4回建設



ランナーフォーラム

①

公共事業の減少など経営環境が厳しさを増す中、新事業への進出や技術開発などに挑む。そんな建設会社が増えている。そんな建設会社が集まって成果や課題を報告する「第4回建設トップランナーフォーラム」が、7月23日、24日の2日間、東京・田町の建築会館で開かれた。27社が取り組みを発表したほか、農業への参入や林業との連携などをテーマにミニフォーラムを開催した。今回は最後となった同フォーラムには、2日間延べ約650人が参加した。詳細を伝える。

新事業の大きな課題は、販路や採算の確保など事業としての確立だ。4年間にわたる建設トップランナーフォーラムを通じて、そういった課題をクリアする企業の発表が目立ってきた。

初日の全体フォーラムでは、農業や介護、技術開発などの分野での地道な取り組みで成果を挙げている五つの事例が報告された。

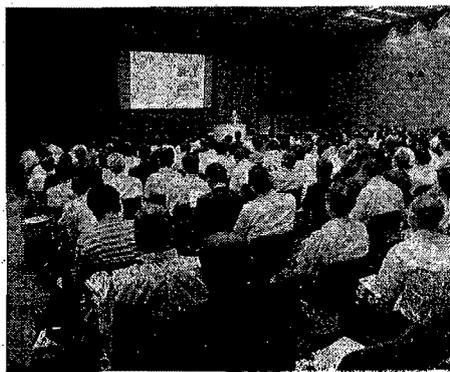
●全体フォーラム事例発表I

地道な取り組みで着実に成果

業生産法人・ヒトロー（宮城県大崎市）の石ヶ森信幸社長はそう話した。建設産業の縮小への危機感から、農業者とともに農業生産法人を設立。無農薬有機栽培米で付加価値のある農業を目指した。当初は農業参入への規制が厳しく、周囲からも批判を受け、四面楚歌（そか）の状況に陥った。

「安全・安心」に対するこだわりを武器に営業を展開。販売網はやがて全国に広がり、インターネットでの販売も飛躍的に拡大した。事業5年目の2008年には累積赤字を解消した。

石ヶ森社長は「安全・安心はこれからの物事の判断基準。地域や銘柄でも漁船への再投資などを経て黒字化を実現。現在では漁業協同組合の水揚げの約50%を占め、組合の経営安定化にも貢献している。」



全体フォーラムの事例発表の様子

田仲寿夫社長は「漁業への参入で大きな力になった」と振り返った。

畜産では、計画から約3年を経て06年3月に東京食肉市場に3頭の隠岐牛を初出荷した。現在は月12頭の出荷体制が整い、単年度黒字にも転換した。

マスコミ報道によって知名度が高まり、08年度には全国から約600人が視察にきた。隠岐牛への評価が起爆剤となっており、ほかの建設会社の参入や、都市部からの若者のイターンなども呼び起こした。鳥には活力がよみがえっているという。

宇田川雅章、日本工業経済新聞社（市成純）

日本には建設業が必要です